戦後文学の中の他者としての異文化と女性像

－小島信夫作品を通じて－

ロンドン大学 SOAS
田中アトキンス　緑

小島信夫（1915−2006）は、1953 年から 1955 年に文壇に出てきた一連の作家達、第三の新人のひとりである。小島の戦後 作品には、 片親が日本人である兵士達や、その中に混じる日本兵、又は日系二世の日本軍兵士の主人公達を、中国での戦闘地の前線、敗戦直後の中国に設定したもの、更には、アメリカを身近に、日常生活に侵入してくるものとして捉えたものなどをもって、 異文化、他者、自己の本質を問うという意味で、他の第三の新人作家作品の中でも一味違ったものを含んだものがある。これら一連の主人公達は、彼らにとってのアンダーセンの言説が設定するところとする国家、そして戦前・戦後、旧・新の日本との帰属感とは何かを問うている。そして、戦後のアメリカの大きな影のもとに、煩悶、苦悩、危惧、杞憂する。 彼らは精神の正常、日常性を保とうと藻掻き、残忍で凶悪な戦中の出来事、国家の敗戦という記憶の強い余韻の中で、反逆の衝動と向き合い、飲み込まれる。戦後日本が、国家として、アメリカによる占領のもとでの西洋へのエクスポージャー、 近代･アメリカ化、 西洋文化を他者化することによって、内観というプロセスを辿ったように、小島作品の主人公達も、同様に、アメリカを他者として理解し、自身を敗戦国家の国民とする自己感を振り切ることはできない。彼ら、男性登場人物とは対象に、女性人物の異文化に対する他者観、同一性はどうなのか。

今回は、日本文学の中での異文化の役割　－　日本文学が、戦争の記憶、戦後の近代化に対峙するに、異文化の他者をどのように用いているか　－　に焦点を当て、「アメリカンスクール」（1954）と「抱擁家族」（1965）の中で、小島信夫の、これらの男性登場人物と対峙し、日本の他者と日本の橋渡しとするエージェンシーとしての女性の登場人物について考察したい。